

羅漢の頭をなでてホッと…!

●最終見学地は「川越大師喜多院」…!

「川越まつり会館」を2時15分に出て、街の散策に向かいました。蔵の街散策組は、西澤さん(高11回)にご案内いただいて一番街の蔵造りの町並み、



“埼玉りそな銀行川越支店” “時の鐘” などの見所を歩きました。菓子屋横丁散策組は、お孫さんへのお土産を…【写真

①:石田さん(16回)が写された時の鐘】。

午後3時、東の空から真っ暗になって来ました。雨粒がぼつぼつと…。全員がバスに揃ったので、次の見学先「川越大師喜多院」に向かいます。途中で私の大好きな「つば焼き」屋があります。

*

◆川越大師喜多院



天台宗川越大師喜多院は、仙芳仙人の故事によると奈良時代

にまでさかのぼるかもしれません。伝えによると仙波辺の漫々たる海水を法力により除き、そこに尊像を安置したといいますが、平安時代、淳和天皇の勅により天長7年(830)慈覚大師円仁により創建された勅願所であって、本尊阿弥陀如来をはじめ不動明王、毘沙門天等を祀り、無量寿寺と名づけました。【写真②③:喜多院ホームページより】

その後、元久2年(1205)兵火で炎上の後、永仁4年(1296)伏見天皇が尊海僧正に再興せしめ

られたとき、慈恵大師(元三大師)をお祀りし官田50石を寄せられ関東天台の中心となりました。



正安3年(1301)後伏見天皇が東国580ヶ寺の本山たる勅書を下し、後奈良天皇は「星野山-現在の山号」の勅額を下しました。更に天文6年(1537)北条氏綱、上杉朝定の兵火で炎上しました。

慶長4年(1599)天海僧正(慈眼大師)は第27世の法灯を継ぎますが、慶長16年(1611)11月徳川家康公が川越を訪れたとき親しく接見しています。そして天海の意見により寺領4万8000坪及び500石を下し、酒井備後守忠利に工事を命じ、仏蔵院北院を喜多院と改め、又4代徳川家綱公のとき東照宮に200石を下すなど寺勢をふるいました。

寛永15年(1638)1月の川越大火で現存の山門(寛永9年建立)を除き堂宇はすべて焼失しました。そこで3代将軍徳川家光公は堀田加賀守正盛に命じてすぐに復興にかかり、江戸城紅葉山(皇居)の別殿を移築して、客殿、書院等に当てました。家光誕生の間、春日局化粧の間があるのはそのためです。その他慈恵堂、多宝塔、慈眼堂、鐘楼門、東照宮、日枝神社などの現存の建物を数年の間に相次いで再建し、それが今日文化財として大切に保存されています。【喜多院ホームページより引用】

*

喜多院の客殿(徳川家光公・誕生の間)や書院(春日局化粧の間)、慈恵堂(大師堂)などを楽しんで、境内南側にある「仙波東照宮」へ。

*

◆仙波東照宮

仙波東照宮は、喜多院第27世住職天海僧正が徳川初代将軍家康公を祀ったものです。

家康公は、元和2年(1616)4月17日、75歳で薨去されると、いったんは静岡県の久能山に葬られましたが、家康公の遺言に従い、元和3年(1617)、2代将軍秀忠は亡父家康公の遺骸をあらためて日光に移葬しました。その時、久能山から日光に至る道中、同年3月15日出発して、道中の各宿に泊りつぎ、同23日、仙波喜多院の大堂(薬師堂、のちに東照宮本地堂とも言いました)に到着しました。

このところで天海僧正は親しく導師となって、3月26日まで、実に4日間、衆僧を集めて、丁重な法要を厳修しました。この長い法要を終えて、次宿・行田忍にお送りした後の元和3年(1617)9月16日、天海僧正は家康公在位の渥恩に感謝の気持ちを伝えるため、また遺柩止留の跡として、家康公の像(高さ八寸八分)を作り、大堂に祀ったのが東照宮の初めです。【写真④:東照宮奥の院】



天海僧正は、この東照宮を広く多くの方に崇拝してもらうため、現在のこの地に高さ五間の丘陵を築きあげて立派な社殿を造り、寛永 10 年（1633）11 月 16 日遷祀しました。

同年 12 月 24 日には、後水天皇が宸翰御神号として「東照大権現」の勅額を下賜されました。ところが寛永 15 年（1638）1 月 28 日、川越街に大火災が起こり、仙の神社、堂塔、門前屋敷まで延焼してしまいました。これを聞いた 3 代将軍徳川家光は、直接東照宮再建の計画を立て、同年 3 月、川越城主堀田加賀守正盛を造宮奉行に命じ、天海僧正を導師として、寛永 17 年（1640）5 月竣工しました。現在の社殿はこのときのものです。

以来、社殿並びに神器等はすべて幕府が運営するものとなりましたが、もともと自祭であり祭資は幕府からいただいております。そこで喜多院第 29 世住職周海僧正（天海の高弟）は祭典の完備を期して、寛文元年（1661）3 月、松平伊豆守信綱（川越城主）を介して、4 代将軍徳川家綱にお願いをし、大仙彼の地 200 石を祭資に供せられました。その後、幕府の手でたびたび修理を加えられ、弘化 4 年（1847）にもっとも大きな修理を行いました。明治 2 年（1869）、諸領一般上地の令により社領を奉遷し、逓減割となり、同年の神仏分離令により、喜多院の管理を離れました。

【仙波東照宮ホームページより引用】

＊

東照宮ではボランティア・ガイドの方から解説を伺い、日光、久能山、そして仙波が三大東照宮と呼ばれる謂われなどを伺いました。拝殿前にある燈籠は、川越藩 8 代藩主・柳沢吉保が赤穂浪士討ち入りの翌日に建立したものだそうです。へええ～。

午後 4 時前に、喜多院に戻って「五百羅漢」【写真⑤】を楽しみました。必ず自分と似ている羅漢がいるそうですが、茶碗を袱紗に乗せて持つ羅漢も…。

◆喜多院「五百羅漢」

川越の観光名所の中でも、ことのほか人気の高い喜多院の五百羅漢。日本三大羅漢の一つに数えられます。この五百余りの羅漢さまは、川越北田島の志誠（しじょう）の発願により、天明 2 年（1782）から文政 8 年（1825）の約 50 年間にわたり建立されたものです。

十大弟子、十六羅漢を含め、533 体のほか、中央高座の大仏に釈迦如来、脇侍の文殊・普賢の両菩薩、左右高座の阿弥陀如来、地藏菩薩を合わせ、全部で 538 体が鎮座しています。



笑うのあり、泣いたのあり、怒ったのあり、ヒソヒソ話をするものあり、本当にさまざまな表情をした羅漢様がおられます。そして、いろいろな仏具、日用品を持っていたり、動物を従えていたり、観察したらいつまで見ても飽きないくらい、変化に富んでいます。

また、深夜こっそりと羅漢さまの頭をなでると、一つだけ必ず温かいものがあり、それは亡くなった親の顔に似ているのだという言い伝えも残っています。【喜多院ホームページより引用】

＊

羅漢（らかん）というのは、阿羅漢。略称して羅漢という。漢訳は応供（おうぐ）。尊敬や施しを受けるに相応しい聖者という意味だそうです。

喜多院の境内を出て、道路反対の「日枝神社」【写真⑥】に向かいました。

◆日枝神社（川越市）

円仁（慈覚大師）が喜多院を創建（天長 7 年・830



年）したおりに、その鎮守として貞観 2 年（860 年）に坂本の日吉大社を勧請

したものであるといわれている。東京赤坂の日枝神社（旧官幣大社）は、文明 10 年（1478 年）、太田道灌が江戸城築城の際に、この川越日枝神社から分祀したものである。（赤坂日枝神社もそう記述している）【ウィキペディア・フリー百科事典】

＊

午後 4 時 20 分、日枝神社を最後として案内役の西澤 堅さんにお別れを告げ、「川越の桜と歴史・文化を楽しむ！」を終了しました。バスにて来たルートに戻って、春日部駅へ 6 時 15 分に到着しました。参加して下さった 33 名 + 1 児の方々に感謝です。次回も沿線での小旅行を企画したいと思います。



【写真⑦】：ヤオコー川越美術館前にて集合写真】